

歴史

原始・古代

- 緩靖天皇（BC581年頃）の御世より御生神事が行われたという伝承があります。（『社記』）
- 崇神天皇七年（BC90）に社の瑞垣が造替された、との「遷宮」がはじめられた記録がみえます。垂仁天皇二十七年（BC2）には御神宝がたてまつられました。（『鴨社遺宮記』）
- 欽明天皇五年（544）四月から賀茂祭（葵祭）が行われました。（『本朝月令』「年中行事抄」）

奈良時代

- 文武天皇二年（698）以降、再々葵祭に大勢の見物人が集まるので警備するよう命令が出されました。（『続日本記』）

平安時代

- 式年遷宮や斎王の制度などが定められました。
- 『源氏物語』『枕草子』など王朝文学にしばしば登場します。
- 全国に六十余箇所もの荘園、御厨が寄進され神社を支えていました。

鎌倉・戦国

- 国民の信仰が神社を支えていくようになり、国家の重要な出来事には必ず祈願が行われました。

江戸時代

- 国と国民の幸福を祈願する神社として、幕府より領地が寄せられました。

明治時代・現代

- 明治初年、全国の神社の代表として官幣大社の首位に置かれ、今日まで国と国民のための祈願を日々行っています。

賀茂御祖神社の名前の由来

古代から、賀茂大神宮（かものおほかみのやしろ）と、明治初年、今日の神社の制度が定まるまで公称され、明治四年（1871）に賀茂御祖神社との名称に定められました。鴨・賀茂とは、神ということ。御祖とは、親のこと。親神をおまつりしているという意味です。また、鴨川の上流にまつられている上賀茂神社と下流にまつられている下鴨神社と通称され、鴨社と略称して呼ばれています。



御祭神とご神徳

当神社の御祭神は、賀茂建角身命と玉依媛命をおまつりしています。国家国民をお守りになり、厄除け、縁結び、安産、子育て、交通安全など人々の暮らしを「守護」されます。

- 世界平和 ■ 五穀豊穡 ■ 殖産興業 ■ 身体難病解除 ■ 方除け ■ 厄除け
- 入学、就職試験の合格 ■ 交通、旅行、操業の安全 ■ 縁結び ■ 安産 ■ 育児

賀茂建角身命（国宝・西御本宮）（写真・左側）

『古事記』など古典には、古代国家を創設のため、八咫鳥（やたがす）となつて神武天皇を「先導」された神話が記されています。

玉依媛命（国宝・東御本宮）（写真・右側）

御祭神賀茂建角身命のお子神で、『山城国風土記』逸文には、丹塗りの矢の神話が記されています。

（11月）	（9月）	（8月）	（7月）		
お火焚祭	名月管絃祭	夏越神事	みたらし祭	賀茂祭	御蔭祭 （御生神事）
28日	旧暦 8月15日	立秋前夜	土用の 丑の日	15日	12日

弓矢をもつて葵祭の沿道を清める神事で、いた「射礼の儀」が始まりと伝えられている。東山三十六峰第二峰の御蔭山で、「ご神霊が神事」と呼ばれ、古代の信仰形態を今にして知られています。

一般に葵祭として知られ、京都三大祭の前、凶作に見舞われて飢饉疫病が蔓延し、され、「鴨の神」の祭礼を行われたのが起源。古式のままだ「宮中の儀」「路頭の儀」「社務の勅祭」です。

土用の丑の日の前後にわたり行われます。五臓六腑を癒し、無病息災を祈ります。

罪・穢れを託された人形をみたらしの池に見立てた斎串がみたらしの池に立てられ、神事とも呼ばれています。

仲秋の名月の日に橋殿（重文）を舞台に行われ、舞楽や十二単衣の平安貴族舞などが奉納され、収穫感謝の祭。火を焚いて大地を温め春の占

主な年間行事

（1月）	（2月）	（3月）	（5月）	
蹴鞠はじめ	節分祭	流し雛	葵祭 流鏝馬神事	斎王代御禊の儀
4日	3日	3日	3日	4日

古くから宮中に伝わる伝統行事「蹴鞠」が、ます。

野菜果物とともに小豆粥と大豆粥をお供え、安泰を祈願します。参拝の方々にお粥が接し、追儺弓神事、豆まき、御真木神事などが行われ、棧俵に乗せたひな人形をみたらし川に流し、る神事です。

三日のやぶさめ神事から始まり、十五日の葵祭。平安時代の騎射の伝統により衣冠などの装束を、上からのめがけて矢を射ます。『日本書紀』に「騎射のことが記されています。葵祭の初めの騎射がおこなわれていました。（『続日本記』）

斎王とは、平安時代、未婚の内親王が当座です。現在は、その伝統を継承し、市民が「王代」として十二単衣装で葵祭にさきがけ